カムイ伝が第1回から入手できます！

愛読者の渇望に応えてバックナンバー再版

第1冊～第6冊（第1回～第12回）頒布中！

カムイ伝の第１回から第12回までを、６分冊にして再版しました。
第１冊（カムイ伝①②）から第６冊（⑪⑫）まで全巻頒布中です。
カムイ伝の再版（第一次）は、一応これでおわりました。これは、
希望者頒布・限定出版で、書店では一切発売しておりませんので、
誌代（送料含む）を添えて、直接下記へお申込み下さい。
なお、５分冊とも「ガロ」の本誌と同じＢ５判です。

頒価各冊230円 〒20円（切手も可・但し１割増）

6冊・1組特価（〒共） 1,200円

申込先・東京都千代田区神田神保町１の55　青　林　堂

新人作家募集！

応募作品のきまり

① 作品の独創性を第一とする。
② テーマ、モチーフ、構成自由。
③ 枚数はなるべく20枚以内。
④ Ｂ４判位の用紙に、必ず、タテ27.3cm ヨコ18.2cmに書くこと。コマ取り自由。
⑤ 墨汁または製図用黒インクを使用し、ウス墨や黒以外の色はつけない。
⑥ セリフやナレーションの文字は、鉛筆で正しく読みやすく書くこと。
⑦ 締切日は設けず、到着次第「ガロ」編集部において審査する。
⑧ 入選作品は「ガロ」誌上に掲載し、原稿料を支払う。
⑨ 返送用切手同封の作品は返却する。
⑩ 作品送り先＝東京都神田神保町１－55 株式会社 青 林 堂「ガロ」編集部

水木しげる傑作短篇集

特価頒布中！

3冊セット送料共500円
（水木しげるカラー絵葉書つき）

● **釣り落した魚**
約束／草／釣り落した魚

● **空のサイフ**
空のサイフ／鉛／聖なる輪／太郎稲荷

● **ああ無情**
ああ無情／神変方丈記／神様／不老不死の術／いぼ／幸運の甘き香り／はかない夢／剣豪とぼたもち／闘牛／こぶ

（「不死鳥を飼う男」と「手袋の怪」は品切れになりました）

各冊・Ａ５判・128頁（東考社版）

申込先・東京都千代田区神田神保町１－55青林堂

「変化」とは——あるいは「不変」とは

上野昂志

昨年の11月に、私は11・12の羽田にふれて、歩道でデモを「見物」している人たちの、歩くことから止まることへ、止まることから車道へ歩み出ることへという動きは、デモ隊の動きと対応しているが、それは今のところ機動隊を中にして平行的に対応しているに過ぎず、その限りにおいて強権の分割作戦は、私たちの内部で依然として力をもっているといわねばならない、と書いたが、一年たった今、その先を書きつぐことができないでいる。確かに、68年になって佐世保から王子、成田、新宿と、時には「市民」と呼ばれ、時には「群衆」、「野次馬」と呼ばれながら、人々は歩道と車道との境界を幾たびか踏みこえていった。人々の身のこなしが、その一瞬、祭へ向う舞踏を思わせ、そして、ほかならぬその身のこなしこそ、彼らの口にする言葉よりはるかに正確に、その意志を語っていたことは言うまでもないが、それをとらえて情況の変化と呼ぶことには戸惑いを覚えるのである。無論、言葉よりもはやいその動作の示すもののうちに、情況の核心があるはずだが、それまで手をこまねいて眺めていた者が機動隊に向って文句をつけたということなどを、静から動への変化として、情況の変化の秤にすることはできない。そんな秤なら始終あがったりさがったりしているし、それをたしたりひいたりして、「支持者の増加」だの、「市民の登場」だのと一喜一憂するほど阿呆らしいこともない。と同時に、それが組織化されていない限り意味がないなどと渋い顔をするほど人をナメた話もない。変化の兆は、歩道からとびだしたり、石をなげたり、わめいたりという動き自体にあるのだが、それをそのまま政治のものさしに合わせて性急に計ることはできないのだ。

歩道と車道の区分がなくなる時はある、だがそれは次の瞬間、もとの日常をとりもどしてしまう、あるいは又、ある場所は日常的な機能を放棄しつつも、そこから数百メートルはなれた所では何事もないというのが現在の状態である。あたかもそこが一個の劇場であり、その中では舞台と客席との区別がなくなる瞬間があっても、劇場の外では目立った反応はないというように。といって、現象があらわに見えないから、何事も起っていないのではない。舞台から客席へ、客席から舞台へ、土足で駆けぬける人々の足は、街路をも見えない影として走っているはずであって、それが目に止まらないからといって何もないのではなく、その疾走のうちに変化が起りつつあるのだが、しかしそれは「新しい情況が切り開かれた」といわれるようなものとしてではない。客席から舞台へ駆け上る者の身振りと、劇場の外で日常の身のこなしの内にあ

る者との関係の全体に情況があるとすれば、それは、ねじれた形として私たちには見えるが、そのねじれの先端に変化の兆しがあり、下部は今だ微動すらしないようである。けれどもそれは、誰がどうで、彼はこうというように、一人一人で違うのではなく、同じ人間の言葉と肉体というような形において分裂した現れかたをしているのである。日常的な動作を瞬間的に捨てて肉体が動いても言葉が追いつかないこともあれば、言葉が先駆しても肉体が動かないこともある。そして、確かに一瞬両者が交叉する時もあるのだが、それは恒常的なものとはなっていない。変化は状態としてはまだ見えていないのである。

むしろ、変化を状態としてあらわしているのは強権の方であろう。その機能的側面だけから見ても、機動隊の装備と「実力行使」の拡大はこの一年の間にすっかり日常化してしまい、今や隠しようもないその姿を露骨に晒し続けている。12月19日の佐世保での原潜寄港阻止行動は、「ほぼ平静に終った」のだが、その「平静」とは機動隊の圧倒的な「規制」を意味していることは言うまでもない。新聞の言葉は、言ってみれば乳房と書くのは一寸恥かしいから胸としておこうということと同じなので、そこに、せめて紙の上だけでも婉曲な表現をしたいと願う新聞記者の可憐な心情を読みとることは自由だが、しかし実際は、海千山千のことさらに使うカマトト的表現の一種と見たほうがいいのではないだろうか。だが、もし機動隊のすさまじい「規制」を眺めながら、それを「平静」と本当に思って書いたとしたら、それも又相当すさまじいが、あり得ないことではない。秩序が守られている限り「事件」はないという眼には、秩序を維持する権力の姿は映らないのだから、すさまじいもへちまの種もあるはずはない。考えてみれば、強権の振う力の増大は、それまでかくれていたものがその実質をあらわにし始めたに過ぎず、それが日常の存続に依拠している以上、その変化が日常化し、状態となるのは当然のことかもしれない。ただ、その増大した力が日常化していることそれ自体が、逆に、私たちの側の変化の兆を陰画的に映していると、おもわれるのである。

つい二、三日前、夜の電車の中で私にからんできた「一見、労務者風」の酔っぱらいが、「おめえ、ちょっとふけてるけど学生かあ。大体、女にモテそうもない面してるけど、やってやがんだろう、てめえ、赤い旗ふったり、青い旗ふったりして暴れてやがんだろ、全学連だろう、この野郎！　そうだよ、見たところおめえは体もいいし、ゲバ棒ふりまわしていやがんだろう、全学連なんぞ、俺が行ってぶっ倒してやらあ、畜生！」というようなことを言ったのにはマイッてしまった。もっとも、「女にもてそうもない面」には大いに異論があったけれど、酔っているものの眼はかすんでよくきかないということは経験的に知っているのでとりたてて問題にはしなかった。彼はその後、「俺は渋谷じゃ、サンちゃんで通ってるんだ」とか、「渋谷に降りりゃ、十人はホームにならんで最敬礼する奴がいる」とかしきりと繰り返していたが、その合い間、合い間に、「全学連なんざ空手で脳みそを抜いてやる」などと息まいていた。サンちゃんはたしかに学生を憎んでいるようであったが、しかしそのようなサンちゃんが、10・21の新宿で石を投げていなかったとは言い切れないのである。

（68年12月27日）

日本忍法伝　第三部

新・日本書紀

第7回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第四章　千木（ちぎ）

（一）

ろくろがまわる。真中の支柱に縄が巻きつき、そこからのびた四本の腕を、三百人の男女が、かけ声とともにまわすのだ。ギリギリギリギリ、縄は柱にまきつく。

そして、山から、海から、巨大な材木がひきおろされ、ひき上げられる。その巨木の進む道には、小さな丸太が並べられている。巨木はその丸太の上をすべるように進んだ。滑車である。

「昔」

その有様を丘の上から眺めながら奈美彦が言った。

「卑弥呼の宮殿を作るときも、これに勝るとも劣らぬ大工事じゃった」

奈美彦は、一瞬往時を思い起こしたのか、目を細めた。

あるいは、奈美彦は、単に昔の工事のもようだけではなく、卑弥呼の生涯で、ただひとり許された男として、誰も知らぬ卑弥呼の肌までを、思い起こしていたのかもしれぬ。

山から海へ、蟻のようにうごめく人々の数は二千、いや、三千。それは勿論邪馬台国の人間ばかりではない。伊都国の人間も、奴国の人間も、不弥国の人間もまじっていた。

日輪天降る！　のしらせが伝わるのは早かった。邪馬台国はいま、再び昔日の繁栄をとりもどしたかに見えた。

法麻呂が丘をかけ上ってくる。

「豊媛、不弥国の王子が、貢物をもって参じました」

「何！　不弥国の王子が！」

一瞬、豊媛の胸はさわいだ。

不弥国の王子とは、あの速瀬彦ではないのか。

速瀬彦、それは、豊媛の胸にはじめて男の肌と、男の荒々しい力を知らせてくれたひとの名であった。

「忍冬の枝を
髪に挿し
玉鬘を
首に懸け
愛しひとの
来るを待とう
満月の
昇るを待とう」

乙女たちの歌声が近づいてくる。

懐かしさがこみ上げる。あれは奴

国の女たちの歌だ、わたしが育った奴国の女たちの……。その奴国の女たちは、頭に鹿の肉や、はちきれそうな熟れた果実を山盛りにした籠をのせて、うたいながらのぼってくる。

その女たちと並ぶようにして、男たちの群れが、牛や鹿や熊の毛皮を、それぞれかぶりながらはずむように歩いてくる。不弥国の男たちである。

豊媛はみとめる。

男たちの先頭にいる速瀬彦の姿と、女たちの先頭にいる美夜日の姿を。

その二人の姿は、豊媛にある甘美な思い出をさそう。それは速瀬彦の肌であり、そして奴国の第一王子不耶彦にいだかれてのたうちまわり、恍惚のうめきを上げていた美夜日の姿態であった。

しかも私は――と豊媛は思う。あの日、速瀬彦が私を捨てて森へ去って以来、私はまだ男を知らぬ。

決して速瀬彦の思い出にしばられていたわけではない。いやむしろそれは不思議なくらいに忘れていたといっていい。あるいは、あれからの身辺の変転のめまぐるしさは、豊媛に速瀬彦のことなど思いかえさせるいとまなど与えなかった、といった方があたっているかもしれない。

豊媛、あの日、別れに際し、速瀬彦の叫んだ言葉を心の中でくりかえしてみる。

「お前がいつか、邪馬台国統一のために立ち上がるとき、わしは必ずかけつける。待っているぞ、その日を――」

「奴国と不弥国の御使者、御苦労!」

奈美彦がリンとした声をはり上げた。

とたん、美夜日は、バタリと倒れるようにひざまづくと、わあーっと泣き出した。

「媛、やはり、あなたは、日輪となって、うれしう、うれしう。存じます」

美夜日は感激の余り泣いているのだ。

「美夜日……」

豊媛は、かがんで、そっと美夜日の手をとった。

「育ててくれたあなたの御恩、忘れはしません」

「もったいのうございます、日輪」

美夜日はあわててあと退った。それはまるで、本物の太陽にふれて、手が火傷をすることをおそれてでもいるかのようであった。

「お忘れ下さいまし、私ごとき女に、育てられたという、いまわしき過去は、お忘れ下さいまし」

そういうと美夜日はひたいを大地にすりつけるのであった。

「奴国の王・不耶彦からのささげものです。どうかおおさめ下さいませ」

そうか、あの不耶彦が、奴国の王になったのか。そして美夜日は、おそらく王の側妾となって、この使者にたてられたものにちがいない。

「奴国王に、御心うけとったとお伝え下さい」

奈美彦がいった。
美夜日はひざまづいたまま、女たちと共に後退っていく。
かわりに速瀬彦が進み出た。
「豊媛、いや、我らが日輪！」
何というまろやかな声であろう。思えば、豊媛は、この声をはじめて女になった夜にきいたのであった。
「おれのいったとおりになった。そなたは今や邪馬台連合国家の日輪！」
「速瀬彦……」
「名前を覚えていて下さいましたか。ありがとう」
「速瀬彦……」
「約束どおりこうしてはせ参じて参りました。今日からはこの速瀬彦、媛の手足として奈美彦、法麻呂と共に働きたく存じます。」
「立派な心じゃ」
奈美彦が、媛の代わりに答えた。
「聞かれたか、媛」
豊媛はうなずく。
「媛、許されたのか。感謝します。我ら力をあわせて、邪馬台連合国家を、昔日にまさるともおとらぬものに作りあげなければなりません」
「そのとおりだ。新しい日輪の威信徐々にその光を他国に及ぼしているとはいうもののまだまだ、これからじゃ」
「左様、伊都国、奴国、不弥国はどうやらこうして手を結び合えた。しかし、斯馬国、己百支国、伊邪国、都支国、弥奴国、好古都国、不呼国……」
「姐奴国、対蘇国、蘇奴国……数え上げればきりがないほどの小国、大国がまだ我が眼前にひろがる。速瀬彦、わが日輪のため、力を！」
何と多くの国があるのだろう。この国をすべてかつての女王・卑弥呼はその勢力下においていたという。私にはとてもそのような力は……と思いながらも、奈美彦、法麻呂、速瀬彦の三人が力を合わせれば……とふとそう思わないでもない。
しかし、それは何故か自分とは他の世界のように思える。久しぶりに出会った速瀬彦に対しても、懐かしさはこみ上げるが、それ以上の感情はわかない。それはあの時、いっそひと思いに速瀬彦が抱きしめていてくれればあるいは異ったのかもしれぬ、と思う。
そして、豊媛は、蟻のようにうごめく大群衆を見下し、山のような供物を前にしながらまったく別のことを考えている。
それは、たった今話しあっていた奈美彦と速瀬彦の、どちらの口からもきくことのできなかった国の名である。
「出雲……イズモ……」
豊媛は、その国の名と、あの銅鐸のひびきと、そして、そう答えたときの生口（奴隷）の若者の、涼しげなひとみを、しずかに頭に浮かべていたのである。

（二）

邪馬台の丘に、新しい女王・豊媛の宮殿は日ましにその形をととのえていく。
そうした日々、豊媛は仮宮殿の内外で、働く男たちや女たちの間から一つの小さな噂話を耳にする。
「奇妙な奴らぞ」
「縄もつたも使わずに材木をとめよる」
「木をけずらせておくと、まるで狂ったように熱中しよる」
「木と木を組みあわせ、金輪も使わぬぞ」
「北の蛮人めが！」
「どこで習い覚えた技術なんだろう」
「木と木を組みあわせ、穴をあけ、がっしりとくみ立てていく。奇妙な

技術じゃ」
　それはどうやら、いつかのあの出雲から来たという生口たちの噂話のようであった。
　豊媛の胸は小さく波立った。
　この国の男たちが、おどろくほどの技術をもった北の蛮人！　いや、それはあの時、彼らが持っていたあの銅鐸という奇妙な金属器にでも充分うかがわれたのかもしれぬ。あれほど見事に、つつじの花をふせたような形に金属を鋳造し、その表に人々の生活を彫りつける技術！　もちろん、邪馬台国にも、それにまさるとも劣らぬ技術はあった。銅剣、銅鉾のそれである。
　そして、かつてこの丘に築かれていたという卑弥呼の大宮殿……。
　だが、人々の噂は、どうやら、邪馬台の技術では計り知ることのできない、別の技術を持つ若者たちがいるということであるらしい。
　豊媛はもう一度あの銅鐸の音をききたいと思う。
　が、奈美彦にきいても笑うだけでくわしいことは何も教えてはくれぬ。
「なァに、とるにたらぬ北狄の幼稚の知恵じゃ、おどろくにはあたらぬ」
　そして、その翌日、あの生口たちは、奈美彦の命により豊媛の仮宮殿の前にひきすえられた。
「北狄め！　日輪に服従をちかえ！　そして幼稚な技術を、我らの前で恥かしげもなく見せびらかすことはやめろ！」
　若者たちは、ただ、微笑むだけである。
「答えろ！　北狄！」
　すると、あの目もとの涼しい若者がたったひとことポツリといった。
「我が出雲は、邪馬台などには負けぬ！」
「なに！　日輪をおそれぬ不敵の言葉、うて！　いためろ！　二度とそのゴウマンな言葉をはけぬように！　奴らの頭から、その出雲とかいう国の名を追いはらえ！」
　たちまち、男たちの鞭は、出雲の生口たちに向かって蛇の如くうねりながらのびた。
「やめさせて！　奈美彦！」
「なりません。こやつら、まだ日輪の其の力は知らぬと見える！　うて！　うて！　うて！」
　生口たちは鞭の下に倒れ、全身を赤くふくれ上がらせながら、それでも一言も発しようとはしない。
　豊媛は、そして知っている。大地にまろびながら、あの若者のひとみはじっと自分の上にそそがれていることを……。
　その夜、仮宮殿で横になりながら、豊媛はねむれない。何故、あの生口

つげ義春氏は「N浦にて」（四〇頁）を執筆中です。いましばらくお待ち下さい。

たちが打たれねばならなかったのか。どうして、奈美彦は、生口たちに「出雲」という名を忘れさせるまで打てといったのか。

本当に「出雲」とは、あの若者がいった如く、邪馬台国には負けぬ技術をもっている国なのか！

仮宮殿に住む女たちは、昼の労働の疲れでぐっすりとねむっているらしい。その中で豊媛だけがめざめていた。

と、そのとき、豊媛は、あるかなしかの人のけはいに、ぱっとおき上がった。

「誰！」

叫ぼうとした口が、いきなり後からおさえられた。

と思う間もなく、両手、両足がかかえ上げられた。

豊媛はせい一杯あばれた。

「日輪、女々しいぞ」

低いが、あざわらうようなひびきが、口をおさえた手のあたりで聞こえた。

それは、昼間、「出雲は邪馬台には負けぬ」と答えたと同じ声であった。

おどろきは、豊媛のからだから抵抗力をなくした。

そのまま、豊媛は数名の男たちにかつがれてひそかに仮宮殿から運び出された。

打ちよせる波の音は、そこが海岸であることを豊媛にわからせる。おそらく、いつか奈美彦とひそんでいたあの洞穴によく似た別の洞くつででもあるのだろう。

豊媛は、そのまわりを、昼間、鞭うたれていた出雲の生口たちにとりかこまれて坐っている。

「私をどうしようというのです」

「日輪を犯すのだ」

「え！」

若者は笑った。

「日輪と、人間の女と、どこがどう違うか興味があってな」

そして若者はうなずいた。

右のはじにいた生口がいきなり豊媛におどりかかる。

「許して下さい」

その口はまたおさえられ、そして今度は両手両足が、一人ずつの男によって、大の字にのばしておさえつけられた。動けぬ！　そう思ったとき、豊媛の頭からすーっと血がひいた。

とたん、豊媛は身体の中にはげしい痛みを感じて、動けぬ身体をうねらせていた。

「次だ！」

男の声がひびく。

そして、やがて、同じような痛みが……。

「次！」

「次！」

「次！」

いつか豊媛はその言葉を数字でもかぞえるようにかぞえつづけた。も

う身体にも頭にも何の感覚ものこってはいなかった。
「さ、のこるはお前だ」
「おれはいい」
豊媛は、うつろな目で「おれはいい」いった男の顔をみつめる。それはあの若者であった。
「おれはいい」
若者はもう一度くりかえすといった。
「帰れ！　そろそろ、見張りの時刻だ」
生口たちはうなずいて洞穴を出た。
「どうして、あなたは……」
若者は、ふと豊媛をみつめると明るく笑った。
「わかったからよ。邪馬台国の日輪も、出雲の女も、そっくりそのまま同じだということがな」
「……」
「さ、早く仮宮殿へ帰れ」
若者はいいすてて出ていこうとする。
「まって！」
豊媛は起き上がった。
「どうして、あなただけ……」
「くどいな、さっきいったはずだ」
「それでは、出雲の国には、日輪はいないのですか」
「ああ、お前のようなまやかしの日輪はいない」
「まやかしの……」
「出雲の日輪は、ことばどおり、大空に輝く」
「……」
「ただ、われわれの心は、大空へむかう。そのことを示す心の御柱が、太く、高く、長く、天へむかってそびえているだけだ」
「心の御柱……」
その時、一瞬、若者の眼に優しい光がよぎった。
「出雲国・多芸志の浜……天の御舎からのびる高橋がつづき、そこから白雲わきたつ海へ浮橋がつき出す。そして、おおわが天鳥船よ」
「天鳥船」
「そうだ。日輪輝く大空を、その日輪の国から舞いおりた天鳥がとぶ。その大鳥をかたどって作った船が天鳥船だ。千人の人がのれるくらい大きく、風よりも早い船だ……」
そういうと、若者は身をひるがえして洞穴を出ていった。
心なしか、その美しい瞳がうるんでいたように豊媛には思えた。
あるいは、と豊媛は考える、あの若者は、思いがけず襲った望郷の気持に、わき上がった涙をかくそうとしたのではなかろうか。
豊媛はゆっくりと身をおこした。
洞穴の外は海であった。
はじめての男、いやはじめての男たち……それが、このような形で訪れたことに対して豊媛の心はまだ、何がどうなったのかわかっていない。
ただ、とにかく汚れたわが身を洗いきよめたかった。
豊媛はザブザブと海の中へ入っていった。
東の空は白みかけていた。
そして、そのほの白さの中に、一瞬豊媛は見た！
千人の人間によって、波を切って進む巨大な船の姿を！
それは、鳥よりも風よりも早く、またたくうちに豊媛の視界から消えた。
邪馬台の丘からようやくざわめきがきこえてくる。
今日もまた日輪の宮殿造りの工事が、これからはじまるのであろう。
（つづく）